第一章　最上紅花概説

染色にその原料として紅花を用いたことは、上代のことからであったが、特に近世徳川時代に至り織物の進歩が著しくなってからは、その染料の原料もまた著しい進歩を示した。特に阿波の藍、武蔵の紫根、出羽最上の紅花、遠江の茜、丹波の刈安等は、最も有名な染色原料となった。最上紅花は、徳川中期以後においては、その質においても、その量においても、その名声は全国有数のものであって、多くの本草関係や農本物産関係の著書に、最上紅花としての名声を謳われたばかりでなく、天保十一年に大阪から出版された「大日本物産相撲」というものに、東方小結として最上紅花が挙げられ、西方の小結阿波藍玉とその名を比肩しているのである。また出版年号不明ではあるが、京都五条大橋東詰町正本屋坐治版の「諸国産物見立相撲番附」は、東方の関脇に最上紅花を、それに配するに西方関脇に阿波藍玉をもってしているが、その何れも、全国的な特産として相撲番附の三役に書記していることは、最上紅花を染料として非常に高く評価していることを示すものである。

紅花が染料として支那から日本に移植されたのは上代のことであるが、羽州最上地方に植えられるようになったのは、さほど遠いことではなく、中世末期から近世初期にかけてのことであろうと思われる。元文五年の記録によれば、「国本御百姓紅花作始候事百年余と申候。」とあり、また天明年中に自早渡世について書上げた記録によれば、元和八年に山形藩主として入部した鳥居忠政が、寛永年中に山形城を普請した際、町割の中に紅花市場を始めて制定したとあることから推測すれば、元和寛永頃から隆盛に趣いたものであろう。しかも最上地方の土性風土が紅花の栽培に適していたために、その善良が以外に早く、寛文頃には既に最上川口輸出品の一つとして、大石田船役所に課税徴集させるまでになった。

山形藩主堀田相模守が、享保十六年に商人や自早たちを呼び出し、国産としての紅花の出高並諸国

の産出高を調査させたが、この時の報告書によると次のようであった。

一、紅花為登荷五駄　宮町
一、同　貳駄　六日町
一、同　四拾四駄　祝籠町
一、同　六拾六駄　七日町
一、同　貳拾七駄　横町
一、同　拾貳駄　八日町
一、同　百三拾四駄　十日町
　　〆貳百九拾駄　七月二日昏改
一、残花　貳拾七駄程　惣町
一、同　六拾五駄　谷地
一、同　四拾駄程　天童
　　〆四百拾五駄程
　外二他国出高
一、百貳拾駄程　奥州福島
一、三拾駄程　奥州三春
一、貳百五拾駄程　同仙台
一、百駄程　西国肥後国
　但シ西国紅花ニ而大坂遣ニ相成
一、拾駄程　尾張

「拾駄程　　遠州
「拾五駄程　　相模
　　〃他国出高六百五拾駄程
　　最上他国惣〃千貳拾駄程

これでみると、享保頃には既に全国産出量の三分一以上を最上地方が占めていたことになるが、その後「最上千駄」という言葉が出た所から推測するに、平均して年産一千駄を産出したことになるのであって、事実寛政十二年の一千四百駄を最高として、四五百駄位の間を上下していた。

一反歩の収穫量は、干花にして大体四貫匁が普通であったから、これから換算すれば、最上千駄で約七百五拾町歩、多い時には一千町歩という作付面積であり、その売買相場は、年によって大きな変動はあったが、大体は四五拾両から八九拾両というのが一駄の値段であったから、最上地方だけで毎年四五万両から八九万両の大金になった訳である。

紅花は干花というものにして、一駄三拾貳貫匁に梱包し、これを大部分は京都の紅花商人に送った。紅花商人は更らに紅粉屋に売捌いたのであるが、紅粉屋は干花から本紅を精製し、染色用或は化粧用にしたのである。

3